

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02874

研究課題名(和文) 日中関係史における「汪兆銘研究」の構築

研究課題名(英文) Building "Wang Jingwei Research" in the History of Japan-China Relation

研究代表者

劉傑 (liu, jie)

早稲田大学・社会科学総合学院・教授

研究者番号：80288018

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、従来の日中関係史のなかで論じられて来なかった「汪兆銘」と「汪兆銘政府」に関する基礎的研究である。研究期間中、私は、日本と日本以外の地域に散在する汪兆銘の個人史料および汪兆銘政権関連の史料を調査し、網羅的な汪兆銘関係史料集の編集に向けての準備を完成した。また、これらの史料に基づいて、汪兆銘の伝記の執筆をはじめている。研究終了後2年以内に、これらの成果を社会に公開し、日中関係史研究に新たな貢献をする予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日中関係史のなかで大きな足跡を残した汪兆銘関係の史料を広く集め、「汪兆銘関係史料」を編集して日本の読者に紹介すると共に、客観的な立場から汪兆銘の人物伝記の完成を目指すものである。汪兆銘は孫文の継承者と目され、近代日中関係史のなかで重要な役割を果たした。しかし、日中戦争中、日本占領地の南京で政権を樹立したため、戦後「売国奴」「漢奸」と評価され、日中関係史の記載から削除された。しかし、彼の思想と行動を解明することは、近代日中関係史を多面的に捉えることに不可欠な作業である。「汪兆銘関係史料」と汪兆銘の伝記の完成は、日中関係史の不足を補い、日中関係史全体像の構築に貢献するものである。

研究成果の概要(英文)：This project is a basic study on Wang jingwei and "Wang jingwei Nanjing Government", which have not been discussed in the history of Japan-China relations. During my research period, I visited archives to investigate the personal historical materials of Wang jingwei and the materials of Wang jingwei Government. I've completed the preparations for editing a detailed collection of materials about wang jingwei. I am writing a biography of wang jingwei based on collected historical materials. Within two years of the completion of the research, I would like to publish my research results and make a new contribution to the study of the history of Japan-China relations.

研究分野：近代日本政治外交史

キーワード：汪兆銘 南京政府 日中関係史 親日 漢奸

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

山田辰雄の『中国国民党左派の研究』(慶應通信、1980年)は国民党、とりわけ孫文や汪兆銘の「左派グループ」に光を当て、「反動的」「売国的」と見なされた国民党の歴史の一部を、初めて中国近代史研究の正面に据えた。

それから30年、中国の急激な社会変動と学問的関心の変化と共に、日本の国民党・国民政府研究も大きな進展を遂げた。横山宏章(『中華民国史』三一書房、1996年、『中華民国』中公新書、1997年)の一連の成果は、賢人支配の善政主義の視角から中華民国時代の政治勢力と治国の理念を検証した。比較的若い世代の研究者は「憲政」の視点から中華民国時代と中華人民共和国時代を連続的に捉え、現代と過去を対話させながら、中国近代史研究の新しい視点を確立させた(中村元哉『戦後中国の憲政実施と言論自由』東京大学出版会、2004年、石塚迅・中村元哉・山本真『憲政と近現代中国』現代人文社、2010年など)。「蒋介石日記」の公開は国民党・国民政府史研究に新しい契機を与えた。日、中、台の研究者による『蒋介石研究-政治・戦争・日本』(山田辰雄・松重充浩編、東方書店、2013年)は、世界各地に散在する蒋介石関係の史料を利用したもので、現在の国民政府研究の水準を反映している。この最新の研究成果は蒋介石の日本留学から戦後の「大陸反攻」構想までカバーし、蒋介石を通して国民政府の政治と軍事及び日中関係を描いた。執筆者の一人である家近亮子の『蒋介石の外交戦略と日中戦争』(岩波書店、2012年)も蒋介石像の再構築に貢献している。

また、中国と台湾の国民党・国民政府研究も大きく前進した。社会科学院近代史研究所が中心になって進められた中華民国史編纂プロジェクトが完成され、中華書局から『中華民国史』(全12巻、他「大事記」「人物伝記」など)が出版されたのは2011年のことである。楊天石の『真実の蒋介石を求めて-蒋介石日記解読』(香港三聯書店、2008年)をはじめとする一連の蒋介石研究は、新たな蒋介石像を描くとともに、中華民国時代の再検討を促した。浙江大学の陳紅民教授が「民国史観」の確立を主張し、中国近代史の再構築の作業を開始している。一方、台湾中央研究院の黄自進を中心とする研究グループも「蒋介石と日本」という視点から中華民国の外交に新たな解釈を提供している。このように、30年来の国民党・国民政府研究の蓄積は中国近代史研究を新たな段階に押し上げたことは言うまでもない。

しかし、蒋介石研究に代表される中華民国史研究の繁栄にもかかわらず、30数年前山田辰雄に提起され、衛藤瀋吉の共鳴を得た、国民政府内の汪兆銘ら左派、「親日」グループに対する研究は極めて限定的な進展しかみられていない。また、学界における日本史研究と中国史研究の交流・融合が不十分なため、中華民国史研究の躍進は、「中国近代史」と切り離せない「日本近代史」研究にどのような新視点、新解釈の可能性を提供しているのか、などについても十分な議論が行われていない。このような研究背景のもと、本研究がスタートしたのである。

2. 研究の目的

汪兆銘研究の問題は主に次の点に表れている。前述山田辰雄の研究は第一次国共合作の時期を対象とし、蒋介石と共産党の間に位置する「大衆運動の保護者」としての汪のイメージを描いた。しかし、山田は満洲事変以降の「蒋介石・汪兆銘合作政権」や、日中戦争前後の日中交渉、汪兆銘政権期の汪兆銘についてはほとんど言及しなかった。一方、1970年代から、ジョン・ボイルに代表される海外の研究者は、当事者の回想録やインタビューを基礎的な史料として、日中戦争期の対日協力者としての汪兆銘を描いた。(John Hunter Boyle *China and Japan at War The Politics of Collaboration*, Stanford, California,

Stanford University Press,1972)。80年代以降、戸部良一や申請者（劉傑）を含む日本を研究拠点とする研究者、及び北京師範大学の蔡徳金や上海復旦大学の石源華をはじめとする研究グループも基本的には日中戦争期の対日協力という視点から汪兆銘研究を展開した（戸部良一『ピースフィーラー』（論創社、1991年）、劉傑『日中戦争下の外交』（吉川弘文館、1995年など）。その背景には、中国側で公開、出版された多数の史料集によって、汪兆銘研究の環境は大きく改善されたという事情があった。その後、従来の研究の不足を指摘した土屋光芳は『汪精衛と民主化の企て』（人間の科学社、2000年）を上梓し、汪兆銘は「愛国者」か「売国奴」か、という議論から離れて、1920年代までの汪兆銘の国家観や民主政治論について思想史的な分析を行った。

しかし、中国側で出版された数冊の伝記（例えば、蔡徳金『汪精衛評伝』四川人民出版社、1988年）を除けば、辛亥革命期から太平洋戦争までの「汪兆銘」を総合的に捉える研究は存在しない。当然ながら、日本史の角度から、汪兆銘に代表される「親日派」の存在が日本人の中国認識や日本の対中政策決定にどのような影響に及ぼしたのかについての研究は皆無と言っても過言ではない。幸いなことに、中国における中華民国史研究の進展と史料の利用環境の改善は、内政と外交の双方から「汪兆銘研究」を充実させる条件を用意してくれた。本研究はこのような日中双方の研究の現状に鑑み、近代日本のなかの「親日派」という視点から日中関係史を捉え直してみたい。

本研究の目的は、以下に要約することができる。

第一は基礎的な環境整備として「汪兆銘関係史料」の形成を目指すことである。申請者がいままで蒐集した汪兆銘の文章、講話記録以外に、日本と中華民国の外交記録には、汪に係する記録が多数眠っている。これらの記録を整理した上で、各国の研究者が利用しやすい形（出版か、インターネットによる）で公開し、日中関係史研究に基礎的な素材を提供する。

第二は「汪兆銘像」を描くことである。従来の汪兆銘研究の不足を意識しながら、新しく発掘した史料を活用して、中国の未来像を構想した思想家としての汪兆銘、蒋介石との対立と協力を繰り返しながらも中華民国史に大きな足跡を残した政治家として汪兆銘、行政院長や外交部長として外交交渉に直接関与した外交家として汪兆銘、対日協力政権をつくり、日中戦争下の占領地を統括した汪兆銘などの汪兆銘像を総合的、且つ実証的に描いてみたい。

第三はいわゆる「親日派」を通して日本近代史のなかの中国ファクターを解明することである。中華民国史研究の進展は、日本近代史の解釈にも変化をもたらしている。例えば1928年から37年までの10年間は「黄金の10年」といわれるほど、中国経済が急速に成長し、政治と文化が大きく進歩した時期と指摘されている。満洲事変後の「蔣汪合作政権」がとった対日政策はこの変化を政治と外交の側面から保障した。日本の政界や経済界もこれに応じて、対中協力の方向に動いた。しかし、軍部の台頭や満洲事変や日中戦争の拡大という歴史事実の前で、30年代までの日本近代史の語り方、とりわけ昭和戦前期の歴史叙述から「日中協力」の部分は十分に検討されていない。これを補うために、いわゆる「親日派」が日本の対中認識と中国政策に与えた影響について、汪兆銘を通して描きたい。

本研究は日本史研究と中国史研究の統合を目指す意味でも特徴的である。日中両国で蒋介石研究が大きく進展しているなかで、さまざまな理由により等閑視されてきた「汪兆銘（親日派）研究」の構築は、日本近代史や日中関係史研究に新たな視角を提供するものである。

3. 研究の方法

本研究はまず、日、中、台及びアメリカに散在する汪兆銘関係の史料を調査整理し、研究者が利用しやすい形で公開することを目指す。汪兆銘関係の史料は、多様な外交記録や、会議記録などの形で各地に散在している。史料に対する調査と分析は本研究の基礎的作業となる。公開の方法は出版か、インターネットを考えている。また、各地の日中関係史研究者、とくに汪兆銘研究者の協力を得ながら、共同研究を進める。史料の相互利用を積極的に推進し、合同研究会の開催を通じて多様な研究視角に対する相互理解を深めていく。さらに研究成果として、日本近代史及び日中関係史のなかの汪兆銘をテーマとする著作をまとめあげ、一連の研究成果を一般に公開する。

4. 研究成果

本研究が目指す第一の成果は、汪兆銘関係史料の統合と公開である。本研究課題を推進する過程において、日本、台湾などに散在する汪兆銘関連の史料を調査、整理を実施した。現在、全史料の統合作業と、一部の重要史料の翻訳作業を行っている。これから1-2年の間に公開することを目指す。

本研究が目指す第二の成果は汪兆銘の伝記を完成することである。現在汪兆銘関係の史料のみならず、その他の関係史料、先行研究の成果などの収集作業を完成し、執筆に入っている。本成果は遅くとも2022年度内に公開する予定である。

その他、研究期間中に発表した関係研究のリストは以下の通りである。

1. 論文

「中日关系的演变与第二次和解」 韓国成均館大学《中国社会科学论丛》2019年第1卷第2号。

「和解に向けた歴史家ネットワークのために」『Toward the future of Asia : My proposal アジアの未来へ 私の提案』2019年。

「中日戦争前関係改善と「中国通」外交官」 『近代中日関係史新論』（255-299頁）稲郷出版社 2017年3月。

2. 著書

共著『人とことば』吉川弘文館、2020年。

共著『人物からたどる近代日中関係史』所収、国書刊行会、2019年。

共著『“日中戦争”とは何だったのか 複眼的視点』ミネルヴァ書房、2017年。

3. 学会報告

「中日関係史中的親日派與親華派----兼談日本外交檔案中的汪精衛」中央研究院近代史研究所、2017年9月7日

「日中関係史のなかの「汪兆銘研究」」（台湾中央研究院主催国際シンポジウム「和解への道、日中戦争の再検討」2017年9月13日）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 劉傑	4. 巻 -
2. 論文標題 和解に向けた歴史家ネットワークのために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Toward the future of Asia : My proposal アジアの未来へ 私の提案	6. 最初と最後の頁 25-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 馬立誠×栄剣×劉傑×川島 真	4. 巻 132巻11号
2. 論文標題 戦略的な和解」から「国民主導の和解」へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中央公論	6. 最初と最後の頁 118-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 劉傑	4. 巻 -
2. 論文標題 「大国化」する中国をどう捉えるのかー日本の中国研究を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国の大国化とアジアー学際的検討	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 劉傑	4. 巻 -
2. 論文標題 蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化 (総合討論)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 「日本・中国・韓国 国史対話の可能性」	6. 最初と最後の頁 142-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 劉傑	4. 巻 53
2. 論文標題 巻頭言 「日中戦争史研究の新段階」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 劉傑	4. 巻 2017/5
2. 論文標題 巻頭言 「北朝鮮危機と日米中関係の再構築」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 新国策	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 劉傑	4. 巻 1
2. 論文標題 中日関係の演変と第2次日中和解	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 韓国成均館大学《中国社会科学論叢》	6. 最初と最後の頁 137 - 153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 習近平時代の中国と日中関係ー「知のプラットフォーム」を目指して
3. 学会等名 早稲田大学社会科学部稲門会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 日本外交官の中国認識と対中国政策
3. 学会等名 台湾中国文化大学・one asia財団主催 全国大学生と大学院生研修塾（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 アジア通外交官芳澤謙吉のこと
3. 学会等名 芳澤謙吉記念館（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 知のプラットフォームとしての現代日本学
3. 学会等名 新アジア学・日本学の創成 - 長崎からアジア、そしてグローバルは普遍性を目指す（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 中国通外交官石射猪太郎をめぐる人びと
3. 学会等名 霞山会創立70周年記念シンポジウム「人物からたどる近代日中関係史
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 日中歴史問題と和解学
3. 学会等名 愛知大学国際中国学センター主催ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 日中歴史対話と和解学
3. 学会等名 :ICCS（愛知大学国際中国学センター）国際シンポジウム「新時代の日中対話の試みー現代中国学方法論の構築を求めて」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 中国の大国化と歴史観の変遷 歴史対話を手がかりに
3. 学会等名 成均館大学成均中国研究所と早稲田大学現代中国研究所共同シンポジウム「習近平時代をどのように解釈するか」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 中日關係史中的親日派與親華派-----兼談日本外交文書中的汪精衛
3. 学会等名 中央研究院近代史研究所（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 日中関係史のなかの「汪兆銘研究」
3. 学会等名 台湾中央研究院主催国際シンポジウム「和解への道、日中戦争の再検討」（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 留学と歴史認識
3. 学会等名 立命館大学主催国際シンポジウム「歴史の越え方 『怨讐の彼方』を目指して」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 日中関係史における「汪兆銘研究」の構築
3. 学会等名 国際シンポジウム「和解への道――日中戦争の再検討」（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 中日歴史問題をめぐる衝突とその特徴--中国の「正義」と日本の「法」
3. 学会等名 日中国力変化と東亜秩序の再構築（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 中国研究と日本研究の間
3. 学会等名 人間文化研究機構現代中国地域研究拠点国際シンポジウム
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 歴史記憶と歴史認識を考える
3. 学会等名 第216回構想日本フォーラム
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 劉傑
2. 発表標題 日中関係における「中国通外交官」
3. 学会等名 台湾中央研究院 近代日中関係の多面性
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 日本歴史学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 245
3. 書名 『人とことば』	

1. 著者名 池田維、劉傑 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 308
3. 書名 『人物からたどる近代日中関係史』	

1. 著者名 夏瑛、陳昭編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新世界出版社	5. 総ページ数 279
3. 書名 寮生 後楽寮を生きる人々	

1. 著者名 劉傑	4. 発行年 2017年
2. 出版社 台湾広場文化	5. 総ページ数 252
3. 書名 中國的強國構想：從甲午戰爭至今天	

1. 著者名 劉傑	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 『日中戦争 とは何だったのか』「第3章 石射猪太郎と日中戦争」	

1. 著者名 劉傑	4. 発行年 2017年
2. 出版社 稻郷出版社	5. 総ページ数 824
3. 書名 『近代中日関係史新論』 「中日戦争前の関係改善與「中国通」外交官」	

1. 著者名 トラン・ヴァン・トゥ、劉傑他	4. 発行年 2015年
2. 出版社 文真堂	5. 総ページ数 365
3. 書名 東アジア経済と労働移動	

1. 著者名 劉傑 他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 350
3. 書名 日中関係史	

1. 著者名 劉傑 川島真	4. 発行年 2016年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 380
3. 書名 大人のための東アジア現代史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----